

# 英語教育と漢字教育

（ことば遊び）



学校法人星名学園

木津幼稚園

## もくじ

はじめに 幼児期の言語教育	・・・ P3 より
① なぜ幼児期に言語教育なのか	
② 語学の能力	
漢字教育	・・・ P4 より
一、はじめに	
二、ねらい	
三、目に見える言葉	
四、漢字“で”教育する	・・・ P5
五、習慣として身に付ける漢字	
六、覚えやすい漢字覚えにくい漢字	
七、うまく話せもしないのに	
八、身近な存在	・・・ P6
九、漢字や英語よりも・・・	
十、言語習得のステップ	
英語教育	・・・ P7
1、はじめに	
2、ねらい	
3、人とのかかわり	
4、口から発する音の数	
5、教育の適時性	
6、言語の習得段階	・・・ P8
7、English Shower Program	
8、What's this?	
9、同じ活動	・・・ P9
10、木津（漢字）コースの英語	

あとがき

## ○ 幼児期の言語教育 ○

### ○●○● 幼児期に言語教育 ○●○●

子どもは5歳になるまでにおよそ1日5~7の新しい言葉を覚えていきます。少なく見えますが5歳までに5,000から10,000語にもなります。大人が単語帳で覚えられる単語数の比ではありません。

ほぼすべての人間がこの言語取得の爆発期に母語の習得を行っています。

「勉強した記憶がない」と言われる方がほとんどです。いいえ、子どもたちは自ら学んでいるのです。お母さんや周囲の方の話す言葉、目に見える情報、体を使って体感した事、これらを駆使して一生懸命コミュニケーションを取ろうとします。なぜなら生きていくために必要だからです。

人間が人間らしく社会性をもって生活するためには何らかの形でコミュニケーションを取らなくてはなりません。世界中の人間のほとんどが言葉を使ってコミュニケーションをするために、子どもたちも言葉を使って生き残るのが最善で最短の方法だという事を自然に理解しています。

ここで狼や猿に育てられた子は言語でのコミュニケーションを行わなくなります。

幼児期に沢山の言葉に触れる事や体験をすることは子どもたちの生きる力となります。それが「単語」として理解されているかどうかは問題ではありません。

### ○●○● 語学の能力 ○●○●

語学って何でしょう？国語の点数が取れる事・・・だけではありませんよね。

当園では国語（英語）のテストの点数が取れるようになる事を目的にはしていません。

教育目標は「明るく・正しい・賢い子」この目標に向かうには「言語」の力が大変有力で、子どもたちの生きていくための基礎となります。

ここでいう語学の能力とは、見る力、聞く力、話す力、読む力、書く力、応用する力、コミュニケーション力、ディベート力、文章作成能力、文章校正能力、弁論力、速記力、速読力、文章読解力。書き出すだけでも山盛りあります。魅力的な話し方をする方、なにか引き付けられるといった数値に表すことができない能力もあります。

幼児期には沢山の生活用語を準備する事が大切です。なぜなら生活に関係のない言葉は子どもたちは習得していかないからです。

子どもたちは情報を収集するときにまず目を使います。そして耳。

見る・聞く・話す・読む・書く・応用する。子どもたちはおよそこの順番で言葉を習得していきます。園の生活や、遊び、自然の中の言葉を沢山準備する事でより豊かな言語表現を獲得していくのです。漢字を読み書きできるようになるといった一点だけを目標にしているのではない事をご理解ください。

○ 漢字教育 ○

□◆◇■ 一、はじめに □◆◇■

日本語は世界一脳を活性化させる言語と言われます。特徴として、文字が漢字かな交じりという特殊な文字になっている事、発音する音素の数が少ない事が主な理由となっています。

以下に視覚言語の説明もあります。意味を持った文字記号とその接続といった特殊な環境で豊かな文章表現ができることが、読み手に素早く情報を伝えることができます。

ひらがなや口から出る言葉だけではこの日本語の能力を最大限に活かすことができません。

▼△▼△ 二、ねらい ▼△▼△

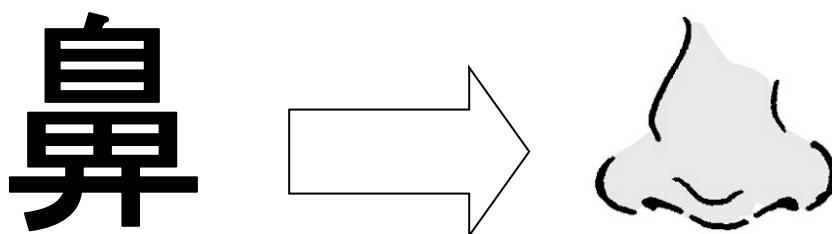
- 1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- 2) 日常生活に必要な言葉が分かるようになると共に、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。
- 3) 言葉や文字に親しみ、意欲あふれる豊かな人間性を養う。
- 4) 物事に積極的に取り組むようになり、成功体験が増える

▼△▼△ 三、目に見える言葉 ▼△▼△

漢字は「表語文字」でかつ「視覚言語」です。意味を表す文字（表意文字）と音を表す文字（表音文字）の両方の性質を持ち、さらに日本語の漢字は複数の音を持ちます。これほど大量の情報を持った文字は他にありません。

漢字カードを見せて「『鼻』は?」と聞くと顔の真中を指し「『花』は?」と聞くと両手を合わせ、広げて花の形を作ります。漢字を見れば違いが分かります。漢字が無い時は「フラワーの花」などと言う必要まで出てきます。

逆に豊かな文字があるために発音する音が少なくなり、同音異義語が多くなったという説があるほど漢字視覚情報は非常に多くなっています。



▼△▼△ 四、漢字“で”教育する ▼△▼△

漢字“を”教える教育では有りません。

- 1、歌を歌う時「『象』さん『象』さんお鼻が長いのね、そうよ母さんも長いのよ」
- 2、お話の時「むかし、むかし、『猿』と『蟹』がいました」
- 3、制作遊びの時「『青』の『色紙』を半分に折りましょう」
- 4、園外活動の時「今日は『公園』に行きます。『団栗』『柿』や『茸』を探しましょう」
- 5、行事の時『運動会』『遠足』『花まつり』など  
『 』の所は漢字でカード又は黒板に書き、さりげなく指し示しながら歌ったりお話ししたりします。教育効果を上げるために漢字を提出しています。

### ▼△▼△ 五、習慣として身に付ける漢字 ▼△▼△

英語教育と同じで『手を洗う』『足を洗う』『晴』『雨』『雪』『男の子』『女の子』など、勉強するということでは無く生活習慣の中に漢字があります。習慣として繰り返し見聞きし身に付けた漢字（言葉）は、なかなか忘れないものなのです。

### ▼△▼△ 六、覚えやすい漢字、覚えにくい漢字 ▼△▼△

漢字は覚えやすいのですが、何でも覚えるとは限りません。幼児の知っているもの興味や関心の有るものの方が覚えます。

- 1) 名詞 1、体の部分 2、動物 3、食べ物 4、乗り物 5、『机』『椅子』など身近に有るもの。
  - 2) 動詞 『座る』『立つ』『走る』『歩く』など実際に体を動かして見せます。
  - 3) 形容詞 『高い』『低い』『長い』『短い』と反対語遊びします。
- 名詞の場合は具体物のほうがより覚えやすく、抽象的なものをさす言葉は覚えにくいものです。動詞や形容詞は目に見えなく幼児には少し高度になります。

# 中 虫 蜂 蜻 蛉

### ▼△▼△ 七、うまく話せもしないのに ▼△▼△

「話しもろくにしないのに、英語や漢字などもってのほか」だと思いがちです。しかしその時が一番大切で表現は出来なくても驚くほど多く脳に吸収されます。ただし「覚えなさい」「昨日も言ったでしょう」「だれだれより遅い」など幼児に負担をかけず、さりげなく繰り返し見せ話します。効果は後日現れます。

学習には臨界期があります。学習効果が大変高い時期です。言語に関しても八歳までの伸

びが最高で徐々に伸び率は下がってきます。この時期に沢山の漢字に触れて読み、親しんでいくことで語彙力の高い子になります。

## ▼△▼△ 八、身近な存在 ▼△▼△

日本人にとって漢字は大変身近な存在です。一番親しみのある漢字は自分の名前。幼稚園の中にはお友達の名前もたくさんあります。同じ漢字が出てきたら「ラッキー！僕と（私と）同じ字だ！」となります。気づかないかもしれませんが町の中にも沢山の教材があります。

## ▼△▼△ 九、漢字や英語よりも・・・ ▼△▼△

英語や漢字よりも心の豊かな子、躰をしっかりと身に付けるとか……………  
当然これらの教育は重要であり進めなければならないと思います。  
英語教育や漢字教育は、これらの教育と全くかけ離れたものではありません。むしろそれを、より効果的に行うためのものです。

また、語彙力が高いということは思慮深いということです。人間の思考はほとんどが言語です。口から音となって出てこない言葉を内言と言います。性格と言われる「優しさ」なども心の中の内言に由来されています。言葉を磨くことは心を磨くことです。

英語教育を導入して20年、漢字教育を導入してから40年たちますが、幼児の能力を高めるなどの効果があり、失うものは何も有りません。今後ともより一層研究し、進めていきたいと思います。

## ▼△▼△ 十、言語習得のステップ ▼△▼△

コンピューターもない40年前に漢字教育の父・石井勲氏が読むことができれば書ける必要はないと予言されていました。今では当たり前になっているパソコンやスマートフォンがあれば手書きで書類を書くことはほとんどなくなりました。ただし、書くことも重要な事には変わりありません。順序として読むことができなければ書くことは大変難しいという事です。さらに言えば幼児期に書き順や使い方を覚えるのはナンセンスです。幼児期の教育は論理的に指導して記憶させる事は理にかなっておらず効果的ではありません。

環境を設え子どもたちが興味を持ったものから自然に、そして沢山の言葉を習得していくことが、生きる力そして素養となって一人の人間として形成していく礎となるでしょう。

## ○ 英語教育 ○

### ■□■□ 1、はじめに ■□■□

赤ちゃんはどここの国に生まれても、あらゆる言語を聞き分けることが出来る能力を持って生まれてきます。ところが、必要のない（普段身近な人が使わない）言葉だと習得せずに脳のネットワーク、シナプスが絶たれてしまいます。同じように「5歳までに十分な言語教育を受けなければ、脳がその機能を失ってしまう」とフランスの言語学者ポール・ショシャールは言っています。したがって幼児期こそ言葉や文字を覚える最適です。今や英語は万国共通語に近く国際化の時代、他国の人とコミュニケーションを深めるには英語力が必要だと思います。

その意味で当園は平成3年度より外人講師を招き週2回のレッスンを受けていましたが、十分ではなく平成18年度より常勤の外国人の先生にクラスを担当して、英語で保育をし、常日頃から遊びながら自然に英語に親しみ身に付けさせたく始めました。

### ■□■□ 2、ねらい ■□■□

- 1) 幼稚園生活を楽しみ、日本語と共に外国語も身につけ、豊かな人間性を養う。
- 2) 進んでいろいろな人とかかわり、愛情や信頼感を持つ。
- 3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。

### ■□■□ 3、人とのかかわり ■□■□

人間は自分以外の人と支え合い、親しみを持って生活しています。そのためには多くのいろいろな人とかかわる力を養うことが重要です。その手段として言葉の習得が大切です。当園ではその事を深く受けとめ外国人の英語の先生にクラスを担当して頂き常日頃から親しみ、国際化の時代にも対応出来る子を育みたいと思います。

### ■□■□ 4、口から発する音の数 ■□■□



日本語の音素（言葉の音）の数はおよそ200音、英語はおよそ700音あります。幼児期から日本語の少ない音素の元で生活していると、英語の微妙なニュアンスが聞き取れなくなります。聞き取れなければ会話も出来なくなる事があります。

### ■□■□ 5、教育の適時性 ■□■□

言語習得の爆発期である幼児期は与えられた言語が多言語だとしても使い分けることができ、

大人の数倍から数十倍の速度で理解する事が出来ます。

赤ちゃんにお父さんが英語、お母さんが日本語、お爺さんがドイツ語、お婆さんがフランス語、叔父さんが中国語で5人の方がそれぞれ話しかけます。なんとその子は5人の人に別々にはなし分けることが出来ると言う実例があります。その子は特別天才だったわけではなく、そのような環境にあったからです。

この時期を逃すと努力し、時間をかけ、勉強をしないと習得するのは難しいです。

## ■□■□ 6、言語の習得段階 ■□■□

言葉の習得には段階があります。

- 1、吸収時期
- 2、オウム返しの時期
- 3、単語・2語語の発生
- 4、ひとり言の時期
- 5、「これ何？」と質問してくる時期
- 6、会話が出来るようになる時期

これは英語だけでなく日本語の習得も同じ段階があります。英語教育をしますと最初のうちは何の反応もしめしません、ただ不思議そうな顔をしているだけです。赤ちゃんに話しかけるのに似ています。でも幼児は聞こえています、気長に休まずに話しかけると、ある時期から子供は急に言葉が出るようになります。特に幼児期は1番の吸収時期がとても長いのでとても重要です。

## ■□■□ 7、English Shower Program ■□■□

勉強するとか、学習すると言うのではなく「座りましょう」「並びましょう」「手を洗いましょう」「トイレに行きましょう」「弁当の中は卵焼き?」「青の色紙で船を作りましょう」等など園生活そのものを英語でシャワーのように話しかけます。もちろん日本の先生は日本語で話かけます。慣れると日本の先生がなにも言わなくても子どもは英語で生活出来るようになります。言葉というものは特別な時に必要になるものではなく、生活の場で必要になるものです。普段行っていることを英語で耳にすることは後に必ず役に立ちます。



## ■□■□ 8、What's this? ■□■□

日本語で「これ何？」と聞くと「耳」と答え英語で「What's this?」と聞くと「ear」と答えます。つまり英語と日本語がこんがらがっていないことが分かります。それだけ子供は言葉の吸収が早くスムーズで違和感なく分類して脳に入っている証拠だと思います。

この次の段階には耳にした言葉を分解して単語に直しそれを並べ替えて作文をして言葉に



するという能力をすべての子どもが持っていることが分かります。それは日本語でも英語でも変わらない能力です。こういったことは逆に子どもの発する言葉の文法や活用の間違いから発見することが可能です。

## ■□■□ 9、同じ活動 ■□■□

英語クラスは英語だけでは有りません。例えば、七夕の時は短冊や輪つなぎや天の川など他のクラスと同じく進めます。盆踊りをして、石川県やかほく市のイベントにも一緒に出掛けます。それを外国人の先生は英語で、日本の先生は日本語で話し指導します。ひらがなのお稽古や楽器、遊戯会練習なども同じです。



## ■□■□ 10、木津（漢字）コースの英語 ■□■□

毎朝玄関で英語の先生は朝の挨拶をし、壁に貼ってある英語のカードを読んでもくれますし、時折各クラスでの生活を同じくし、歌やゲームを楽しみます。その上自由遊びの時は木津（漢字）コースの子ともかかわります。ですから木津（漢字）コースの子でも、英語力は高くなって来ています。

逆に英語コースの子たちでも毎日俳句に触れ、漢字の素話を聞きます。どちらのコースをとっても必ず親しむことができます。

## ○ あとがき ○

子どもが虫を取ってきて餌が無いと言います。餌あげないとどうなる？と聞いたら「死むー」という言葉が。

実はこの「死ぬ」という言葉日本語では珍しい「ナ行変格活用」という 2 つしかない特殊な言葉です。大人は経験上「死ぬ」とうまく活用できます。「死む」と活用させるためにはマ行で活用します。マ行で活用する言葉は沢山ありますし、「飲む」「つかむ」「囲む」と子どもたちの身近にもたくさん出てきます。

外国人が日本語を勉強したくない理由に漢字の分量の多さ（無限にありそう）ともう一つにこの動詞の活用があります。論理的に文章で表すことが難しく使っていて覚えるしかないですね。

そんな難しいことを子どもたちは体験的にナ行によく似たマ行を終止形的に使うとして「死む」と応用させて話をしています。

この言葉を聞いたときに子どもたちの頭の中ではすごい文法力が培われていると驚かされます。

ちなみに死ぬの他もう一つナ行変格活用する動詞わかりますか？